

談話室

第20回国際心理学会議

印 東 太 郎†

昨年8月13日-19日に東京プリンスホテルにおいて第20回国際心理学会議が開催された。ヨーロッパ、北米大陸以外の地で本会議が催されたのは初めてのことである。参加者は50余国から約1400名、本邦から約1100名で、本会議は4年に1回ずつ開かれるが、これは1963年のモスクワにおける大会につぐ最大の規模であった。今まで通り、シンポジウムと個人発表とを中心とする形式で、50余のシンポジウムの中から本学会に関連のあるものを拾うと次のようになる。「短期記憶のメカニズム」、「人間-機械系」、「認知に関する数学モデル」、「認知における情報処理」、「人間行動のコンピュータ・シミュレーション」、「意志決定の力動的側面」など。

これらシンポジウムには4~5名の講演者と2~3人の討論者があらかじめ指定されており、2時間があてられていたが、本会議においては特に、希望者だけが小部屋に集まりさらに2時間、自由に討論を重ねられるように企画されていた。この企画は甚だ好評であったといえる。海外からの参加者のうち、本学会会員に比較的親しい名前をあげると次のようになる。カッコの中に主な専攻テーマをあげておいた。米国から H. A. Simon (人工知能, カーネギー・メロン大学), W. Edwards (主観的確率と意志決定, ミシガン大学), M. S. Watanabe (渡辺慧, 図形認知, 現在ハワイ大学), D. A. Norman (記憶の数学モデル, ラフォヤ, カリフォルニア大学), G. Sperling (視覚系のパフォーマー, ニューヨーク大学), E. C. Carterette (聴覚モデル, ロスアンジュルス, カリフォルニア大学), J. D. Carroll (多次元尺度構成法, ベル研究所), D. M. Green (信号検出理論, ラフォヤ, カリフォルニア大学),

D. A. Luce (測定理論, 数学モデル一般, アーバイン, カリフォルニア大学), 西ドイツから M. R. Schroeder (聴覚モデル, ゲッチンゲン大学), 東ドイツから F. Klix (人間-機械系, フンボルト大学), ソ連から B. F. Lomov (人間工学)。次の第21回会議は1976年パリで、第22回は1980年ライプツヒヒで開催されることが決定している。隣接領野からの参加も歓迎されるので、本会会員も加わって頂ければと思う。

人間の情報処理過程のコンピュータ・シミュレーションの現状に関し、カーネギー・メロン大学におけるサイモンの協同研究者 L. W. Gregg は次のように指摘している。(サイモン自身は講演を行なわなかった。) A. Newell などが推進してきた問題解決プログラム (G. P. S) のようなものを静的な形のシミュレーションと呼ぶとすれば、現在のシミュレーションはよりダイナミックなもので、1ステップごとの被験者の応答、状態に応じて進行が自由に变化され、それにより被験者が実際に採っている方略 (strategy) と問題の内部表現 (internal representation) とをより明確するところに重点がおかれている。それというも、コンピュータ・センターの大型機と実験室の小型機とをうまくつなげ、オン・ラインコントロールがより有効に行なわれるようになってきているからで、日本の大学の現状からいうと羨しい話といわなければならない。

また、長期記憶を情報のネットワークという形で捉え、それによって retrieval, 忘却, 連想などの現象をシミュレートしようというスタイルの研究が急激に増加したが、それも大容量のコンピュータの普及と記号リスト処理言語の発達を除いては考えられない。

(昭和47年11月21日受付)

† 慶応義塾大学文学部心理学研究室